札幌大学総合論叢　第24号（2007年10月）

〈論文〉

喪・忘れまいとすること・空隙恐怖
――19世紀におけるリビドー領域の拡大――

松　本　由起子

『夢判断』最終章の冒頭を飾るのが「燃える子供の夢」である。[1] フロイトはこの夢を人づてに知ったにすぎず，出所不明，したがって分析しようにも詳細を知りようがないという意味で分析に耐えないと言ってもいいと思うが，にもかかわらず，フロイトはこの夢を使った。わかっているのは，病気の子供を昼夜看病した末になくしたばかりの父親が，遺体が寝かされている部屋の隣室で仮眠中に見た夢であり，子供が枕元に立って腕をつかんで「お父さん，ぼくが燃えているのが見えないの？」と訴えるので目を覚まし，隣室からの異様に明るい光を見て駆け付けると，子供の腕周辺が倒れた蝋燭から燃え移った炎に包まれており，遺体の番につけた老人は居眠りしていたということだけだ。

フロイトによれば，「この感動的な夢を説明するのは簡単である。これを聞いてきた患者によると，その夢セミナーの講師も正しく解釈していたという。開いたドアから，炎の光が眠っていた父親の目に届いたために，起きていたら到達したはずの結論，すなわち蝋燭が倒れて遺体のそばでなにかに火がついているという結論に達したということだ」。そして「その解釈を変えようとは思わないが，ひとつ付け加えるなら，この夢の内容は多重決定されているにちがいなく，子供が語る言葉は，生前，実際にその子が口にしたもので構成されており，それは父親の頭の中で重大な出来事に結び付けられているはずだ」とした上で，この危機的状況下で父親が目を覚ますことなく夢を見続けたのは，ひとつには，子供を一瞬でも長く生かしておきたいという欲望によるのだし，また，夢が「眠りの番人」として，そのもっとも基本的な機能，すなわち睡眠欲求を満たす機能を果たしているから

[1] Sigmund Freud, The Interpretation of Dreams, *Standard Edition Vol. 4 & 5*, trans. James Strachey (London: Hogarth Press, 1995 [1953]), pp. 509-511.（以下，本文中のフロイトからの引用は筆者の訳）

だと言う。

そして，以降の解釈の方向性をほぼ決定付けたとも言えるラカンは，この夢が，眠りから離れることなく，夢を引き起こした現実に応えていることを指摘し，逆にではなぜ結局目覚めてしまったのか？と問い，「お父さん，見えないの？」と言いに来る子供が父の罪を喚起するからだとしている。[2]

いずれも妥当な解釈だろうが，これしか情報のない夢では，どれが正しいと確定のしようもない。また，すでに正解が出ているのかどうかわからないというだけでなく，まだ解釈の可能性が出尽くしていないように思われる。本論では，そうした，まだ言及されていない解釈をとりあげ，そのような可能性がこれまでとりあげられなかったことの意味を，19 世紀における「忘れまいとすること」と「喪」の拡大に見られる，リビドー領域のあり方の変化に関わるものとして考えてみたい。

1 「燃える子供の夢」の遡及的成立の可能性

では，この夢が覚醒後に遡及的に作られたものではないかという可能性を考えてみよう。父親の作話だと言いたいのではない。自我が時間的な経過を「誤認」しうるということである。

(1)「予知夢」

『夢判断』についている短い付録では，ある立派な夫人が見たという「予知夢」が報告されている。[3] B 夫人は，ウイーンの目抜き通り，ケルントナー通りのある店の前で，古い知り合いの医者，K 博士とばったり出会うという夢を見たその日，まさにその通りのことが起こったのだという。しかし夫人との質疑応答の結果，フロイトは K 博士とばったり出会うまでに，夫人が前夜の夢を思い出していた証拠がないことを突きとめる。だとすれば，B 夫人は，K 博士と出会ったところで，前夜まさにこの場所で出会う夢を見たという確信を抱いたのだとフロイトは考える。

25 年前，B 夫人は年輩の資産家と結婚した。しかし数年後，夫は資産を失い，結核に倒れ，それから夫が死に至るまで，夫人が音楽のレッスンで生計を支えることになる。こ

---

[2] Jacques Lacan, *The Four Fundamental Concepts of Psycho-analysis*, tans. Alan Sheridan (Penguin Books, 1994 [1977]), p. 34f.

[3] Sigmund Freud, The Interpretation of Dreams, *SE Vol. 5*, pp. 623-625.

の時期，かかりつけの医者だったのがK博士で，生徒を探してくるなどして助けてくれた。もうひとり，やはりK博士という弁護士がいて，こちらは壊滅状態になった夫の仕事の後始末をしてくれただけでなく，夫人に求愛もして，夫人は後にも先にもこの時だけ情熱に火がついた状態になったという。しかし，夫人は夫が生きているうちも死んでからも「道を踏み外す」ことはなかった。そしてB夫人は，この時期に特筆すべき偶然の出会いがあったと言う。弁護士のK博士のことを思って情熱に駆られ，ひとりで啜り泣いていたまさにその瞬間，ドアが開いて博士が入ってきたというものだ。それから25年，B夫人は再婚し，再度未亡人になったが，今度は子供と遺産が残され，弁護士のK博士は，今も助言者兼資産管理者としてしばしばB夫人の家に出入りしている。

そこでフロイトは推測する。おそらく夢を見る数日前に，K博士が来るだろうと思っていたのに来なかったということがあったのだろうと。そこで夫人はノスタルジックになり，恋愛当時のランデブーの夢を見た。その夢は，打ち合わせもしていないのに来てほしいと思ったまさにその時にK博士が登場したことを思い出させた。夫人は，おそらく若い頃の冷淡さに対する罰としてこんな夢をよく見ているのだろうが，かつてのランデブーの記憶に満ちたこのような夢は，再婚しているB夫人にとって考えたいものではない。だから起きる時に忘れる。この「予知夢」の実態もそういう夢だったのであろう。ところが，医者のK博士と偶然，本当に久しぶりに出会ったとたんに，このK博士も当時の関係者であり，救援者でもあったために，本命の弁護士K博士のスクリーン・フィギュアとなって，夢の記憶がよみがえり，「そうだ，昨日，K博士とのランデブーを夢に見たんだった」とB夫人は思ったのだと。つまり，医者のK博士を，弁護士K博士のかわりに挿入し，夢の内容であったランデブーは，まさにこの場所を夢に見たのだという確信に置き換えられた。そこで，B夫人が夢が実現されたという印象を抱いたとすれば，それは，かつて悲嘆の中でK博士に焦がれ，その望みが満たされたという感動のランデブーと同じ効果を持つのであると。

こうしてフロイトはわずか3ページで手際よく「予知夢」を解体してしまう。医師のK博士にばったり出会うということが現に起こってからでなければ，こういう夢ができるはずがないというフロイトの確信には微塵の揺らぎもない。また，夢というのが可塑性の高いメディアであり，それは遡及的加工に対しても開かれている可塑性なのだと，フロイトは熟知していた。

(2) アウェアネス発生の遅延＋発生時点の前戻し

神経生理学者のベンジャミン・リベットらは，刺激をめぐるアウェアネスを研究し，刺激は一定の長さや強さに至って閾値を超えたところではじめてアウェアネスを生じるのであり，刺激を検出してからアウェアネスを生じるまでには閾値に至るまでの長さに相当する0.5秒もの遅れがあり，かつ，その遅れが，アウェアネス発生後に巻き戻されて，まるで遅れがないかのように意識されるということを報告している。[4]

たとえば「車で走っているところに子供がボールを追って飛び出してきて，ブレーキを踏んだ」場合，「ブレーキを踏む」行為は，情報が意識化されないまま処理された結果として無意識に行われており，ブレーキを踏んだ時点では，子供が飛び出してきたという事態にまだ気付いていないのだという。ではなぜわたしたちは「子供が出てきたからブレーキを踏んだ」と感じるのかというと，それはアウェアネス発生後に「主観的な時間遡及」が起こり，その「前戻し」の結果，「遅延した経験は，あたかも遅延などまったくないかのように主観的に時間付けられ」るからなのである。(図1)

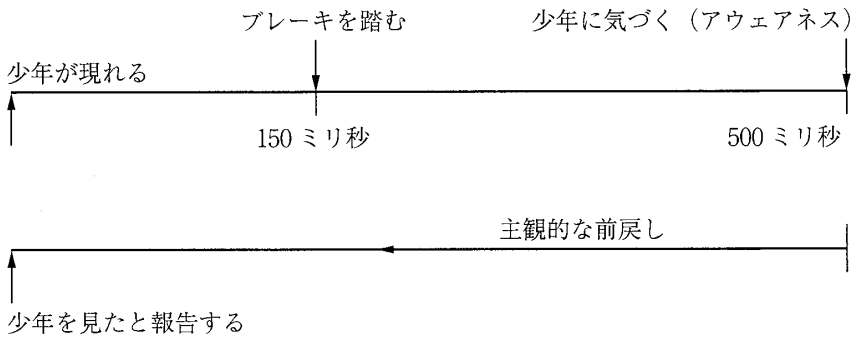

図1　少年が走っている車の前に飛び出したときの一連の出来事[5]

フロイトによるB夫人の「予知夢」の解釈は，この「アウェアネス発生の遅延＋アウェアネス発生時点の前戻し」という理解と同じパターンでなされている。ケルントナー通りでの偶然の出会いによって一種の閾値に達したことで夢のアウェアネスが生じ，そのアウェアネス発生時点が「前戻し」されて，結果的に，「前夜ライブで見た夢だ」と感じたと。さらにリベットらは，ある刺激によって生じたアウェアネスが，その刺激に先行する刺激

[4] ベンジャミン・リベット『マインド・タイム』下條信輔訳（岩波書店，2005年）
[5] リベット (2005), *op. cit.*, p. 107.

や後続の刺激によって影響を受けることがあるという実験結果も示している。B夫人の前戻しされた夢が，ケルントナー通りでの出来事という後続の刺激に影響を受け，それを引用するかたちで再編されていることも，こうした理解に沿って見れば決して不自然とは思われない。

だとすれば，「燃える子供の夢」でも，聴覚か嗅覚で隣室の異常を感知して覚醒，駆け付けて子供の腕が燃えているのを見てから，その現実のアクシデントの引用を「前戻し」して，「燃えているのが見えないの？」と腕をつかんで起こされる夢を見たという確信を抱いたと考えることは可能だろう。

2 「抑圧」を見い出す意志

こうしてみると，「燃える子供の夢」を，覚醒後に現実を取り込んで加工された夢ではないかと考えてみる理由は充分あるように思われる。さらに言えば，子供の遺体の腕が焼けているのを見たところで，既存の夢に手が加えられたのではなく，そこではじめて夢が作られ，遡って記憶に埋め込まれたという可能性も排除はできないだろう。だが，一見して「できすぎ」な感じがないとは言えない夢であるにもかかわらず，フロイトは（そしてラカンや後続のラカニアンたちも）「燃える子供の夢」のこうした可能性には触れていない。子供の死をめぐる，いかにも痛切で「感動的」な夢であるために，偶然の一致がもたらすその感動を減ずるような読み方に思わずブレーキがかかるというようなナイーブさは，無意識的な検閲を見破っては葬り去るのが仕事と言って過言ではない精神分析の場合，おそらく持ち合わせていないだろう。ではなぜ，覚醒後の加工もしくは製造の可能性が言及されないのかと考えると，それは「抑圧」という概念を危うくすることになるからではないかと思われる。

精神分析の作業の基本は記憶を忘却から救い出すことであり，そこでは想起不能は抵抗によるものとみなされる。リベットらが指摘する，知覚される刺激の一部だけが充分な長さ・強さを持って閾値を超え，アウェアネスを生じるという状況が，認知の仕組の上で一般的なものだとすると，「知覚が表象を獲得しないまま（＝無意識）に留まり，しかもそのままで機能しうる」という精神分析が指摘した事態が，しかし精神分析で言うところの「抑圧」のためではなく，単に認知の仕組上，機能的に起こっていることになる。そうなれば「抑圧」という考え方の必然性は薄れるだろう。「抑圧」の図式の上では，アウェアネスの欠如は抑圧によるのであり，そこでは知覚に対応するアウェアネスの存在が前提とされている。だからこそ，その不在は努力によって回復されねばならない。つまり「忘れ

られてはならない」ものなのである。

「燃える子供の夢」に続く「夢の忘却」の説明の中で，フロイトは，「夢の忘却は，心的な検閲というものを考えない限り理解しえない」と言い切っている。そして「夢の忘却が特定の意図をもっており，抵抗という目的に仕えるものであることを示す確実な証拠」として，夢を解釈している最中に，抜けていた箇所が「それまで忘れていた」と思い出されることが多く，しかもそうして忘却から救い出された部分は，必ず夢の最も重要な箇所なのだと言う。たしかに心理的な理由で抑圧がかかって忘却が起こる場合はある。とはいえ，アウェアネスを生じるのが知覚の一部にすぎないとすれば，本来意識に到達するはずの知覚が「検閲」によって閉め出されているとは言えなくなる。

B夫人の「予知夢」の解釈にあたって，フロイトは「このように実際の出来事があった後で夢が作られたということ――予知夢を可能にするのはそれしかありえないのだが――これは他でもない，検閲の一形態なのである。検閲のお陰で，この夢は意識へと至る道を見い出しえたのだ」とし，つまり，B夫人は夢をいったんすっかり忘れ，忘れていたからこそ，その間は歪曲されずに済んだのだが，K博士にばったり出会った弾みで思い出されたとたんに，二人のK博士をすり替え，かつての感動のランデブーを予知夢実現の感動へとすり替えずにいられないのだ，それが検閲なのであり，検閲あっての予知夢なのだと言う。だがこれも，アウェアネスの発生に至らない知覚の遍在を前提とすれば，B夫人が「忘れた」のではなく，アウェアエス発生に至らなかったに過ぎないという可能性が排除できなくなり，したがって「抑圧」によって忘れられ，「検閲」によってこそ成立しえたのだと考える必要もなくなる。むしろ，これをあえて「抑圧」であり「検閲」であると見なすには，その眼差しを支える，ある種の意志が必要だろう。おそらく19世紀という時代が，その種の強力な意志を持っていたのだ。

3　死者を忘れまいとすることと空隙恐怖：リビドー領域をめぐる変化

ナポレオン戦争の終結から世紀半ば頃まで，ウイーンを中心にビーダーマイヤー様式が展開された。この様式は工芸，特に家具で知られる。ウイーンはもともと家具の生産地だったが，戦争終結による政情安定と，工業化による新しい工法の導入（図2），政府による積極的な家具産業の保護を受けて様式の発信地となったのである。この様式をリードした家具工房は，価格を抑えた比較的実用的な既製品（図3）を店頭やカタログで販売するという，中産階級をターゲットにしたマーケティングでスタイルで浸透させていった。それ以前，王侯貴族向けの注文製作が時代のスタイルを規定したのとは異なる展開であり，

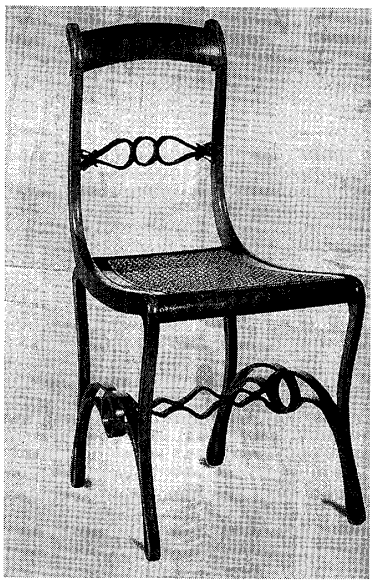

図2　曲げ木細工の椅子[6]

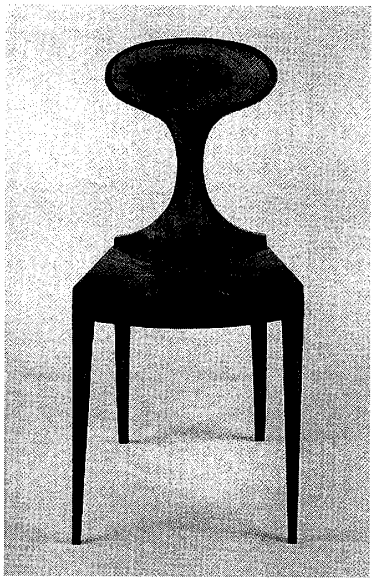

図3　椅　子[7]

貴族階級もこのスタイルを受け入れ，ビーダーマイヤー様式はブルジョアがリードした最初の装飾様式となった。凡庸，小市民的と言われるにせよ，世紀末にはヨーゼフ・ホフマンらによるウイーンを中心とする美術の動きにあたって早くも「再発見」され，20世紀のインテリアにも影響を与えている。

広い意味では新古典主義に属すビーダーマイヤー様式だが，ここではギリシャ・ローマ的要素は，壮大な古代寺院からブルジョア家庭の居間のサイズへと縮小され（図4，5），またロロコ的な装飾要素は劇的に拡大・単純化されて構造に取り込まれる（図6：渦巻モチーフに注目）。ブルジョア家庭の居間と財布に合わせて既存の様式の要素を拡大･縮小し，バランス重視で単純化を図ったこの様式は，親密な雰囲気（図7），子供や動物に向けられる愛情深い眼差し（図8，9），誰某の何々を記念してといった記念品や土産物愛好（図10），壁際にソファ，その前にテーブル，それを囲んでアームチェアなどを配する特徴的な「団欒」コーナー（図11～13）など，親密，日常，感傷，家族といった言葉に結び付けられる特徴を示すようになる。

家族が団欒する「家」，親密で感傷的なブルジョア的「家族愛」の空間が，効率的商品化の結果だったのか，あるいはそうした経済的配慮の結果をブルジョアが「愛」と名付けて商品化したのか，いずれにせよ，19世紀前半，成長してきたブルジョア階級がはじめ

---

[6] トーネット (Thonet) のデザイン。1835年頃。Dominic R. Stone, *The Art of Biedermeier* (Secaucus: Charterwell Books, 1990), p. 52.

[7] 1820年頃の椅子。Jiří Rak et al., *Biedermeier: Art and Culture in Central Europe 1815-1848*, trans. Lawrence Jenkins (Milan: Skira, 2001), p. 89.

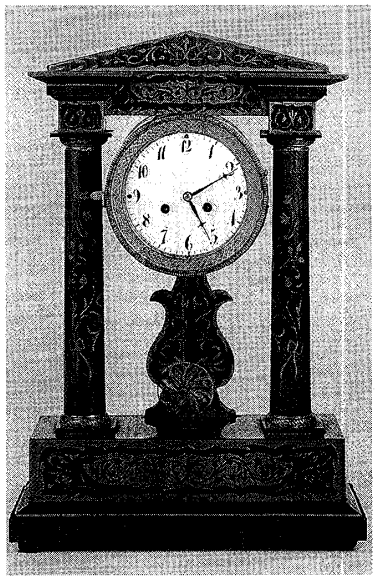

図4　時　計[8]

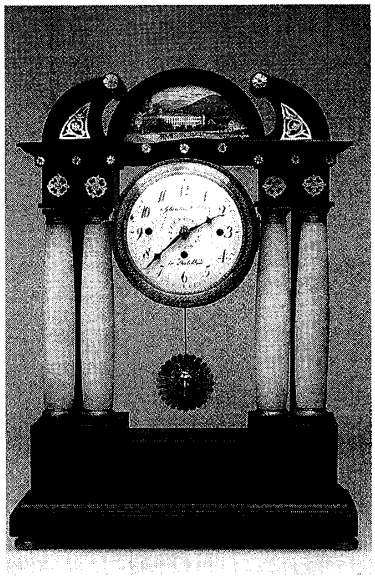

図5　時　計[9]

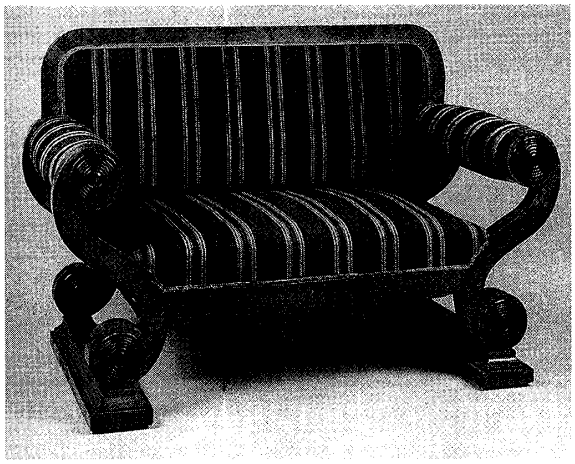

図6　渦巻モチーフのソファ[10]

327: E. Gärtner. *Living Room of the Master Smith, E. F. A. Hauschild, in Stralauer Strasse, Berlin.* MÄRKISCHES MUSEUM, BERLIN.

図7　1830年頃のインテリア[11]

図8 『夕べの祈り』[12]

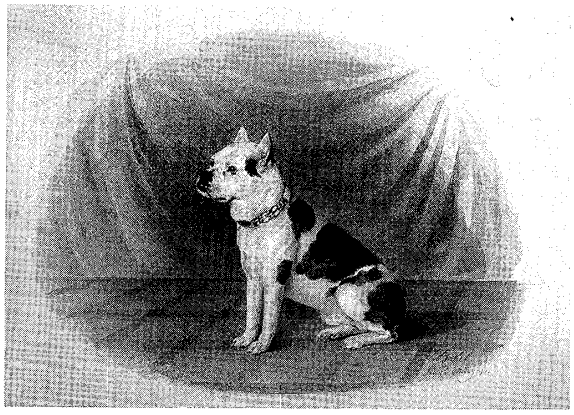

図9 『愛犬ボレルの肖像』[13]

[8,9] 時計。どちらも 1830 年頃のもの。*ibid.*, p. 92.

[10] 1820 年頃。ボヘミア製。*ibid.*, p. 88.

[11] ベルリンのブルジョア家庭。娘の一人は食事中の父親の膝にもたれている。1830 年頃のインテリア。Mario Praz, *An Illustrated History of Furnishing*, trans. William Weaver (New York: George Braziller, 1964), p. 328.

[12] 子供をよく描いたウイーンの画家 Peter Fendi による 1840 年頃の作品。*ibid.*, p. 328.

[13] 1841 年。Rak et al. (2001) op. cit., p. 139.

図 10　記念のカップ[14]

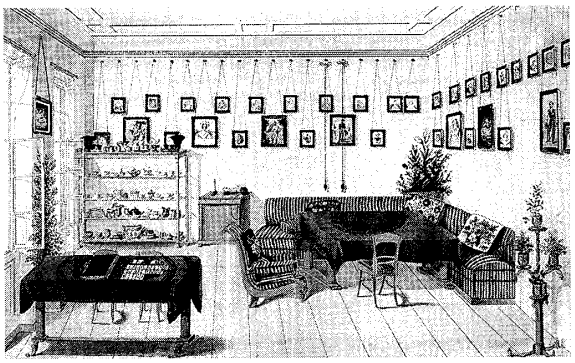

図 11　1830-1835 年頃の居間[15]

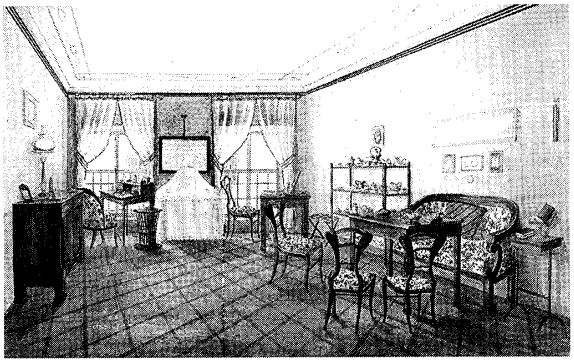

図 12　1837-1842 年頃の居間[16]

---

[14]「1816 年 5 月 21 日を記念し，愛する父より」と入ったカップ。Stone (1990), *op. cit.*, p. 60.

[15] Rak et al. (2001), *op. cit.*, p. 73.

[16] Robert Waissenberger et al., *Vienna in the Biedermeier Era 1815-1848* (New York: Rizzoli, 1986), p. 111.

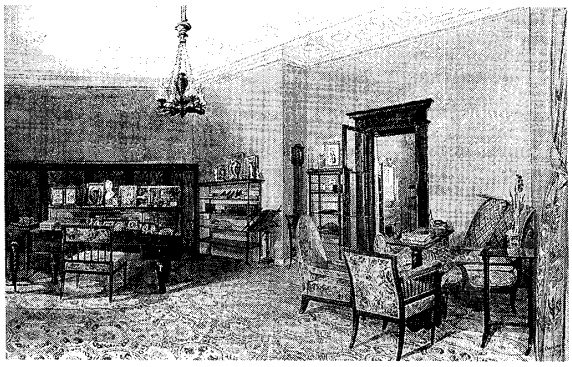

図 13　1839 年頃の居間[17]

て自らのスタイルを持ったとき，その様式は近代ブルジョアの「家」をめぐる本質的特徴を体現するものだったと言えるだろう。スケールとコストを抑えた商品化が，家族愛や親密さに結びついたところに，ブルジョア文化の新しさとその核がある。

中産階級の家庭に子供部屋が登場したのは，この時期である。[18]　また，ドイツ語圏で子供時代にターゲットを絞った回想録が出はじめたのもこの頃だった。[19]　19 世紀は，中産階級にとって子供がコスト要因になった時期であり，そのため中産階級は子供の数を減らしはじめていた。それまで不思議なほど見られなかったという避妊による出生率の管理が，ついにはじまったのである。子供の数の減少に反比例して，子供ひとりあたりの経済的／精神的投資を大きくすることができたという部分もあったのかもしれない。フロイトの性理論は，乳幼児期の性の発達段階に注目することで成立したが，そういう眼差しを可能にする環境が整ったのが，ブルジョア的「家族愛」が自らの様式を持つに至った 19 世紀だったのである。そしてこの頃，死をめぐる変化が「保存へのあらたな意志」をめぐって，特に子供に関して起こったとフィリップ・アリエスは指摘している。[20]　それは，フロイト的な言い方をするなら，喪の過程の延長・拡大とでもいうべきものだった。

ではまず，それ以前，たとえば 3 世紀ほど前はどんな感じだったのか，1592 年，ニュルンベルクでの，大商人には程遠いものの安定した商人一家の一人息子，8 歳のバルタザールの死を見てみよう。このときバルタザールの父親はアウグスブルクに出張中だった。病状が危機的になってきたのを見て，母親が帰宅を促す手紙を送ったものの間に合わず，子供は死んでしまう。これはその 4 日後，まだ出張先にいる夫に子供の死を報告する手紙

---

[17] *ibid.*, p. 111.

[18] インゲボルク・ヴェーバー=ケラーマン『子ども部屋』田尻三千夫訳（白水社，1996 年），p. 27.

[19] イレーネ・ハルダッハ=ピンケ／ゲルト・ハルダッハ編『ドイツ／子どもの社会史　1700–1900 年の自伝による証言』木村育代他訳（勁草書房，1992 年），p. 70.

[20] フィリップ・アリエス『図説　死の文化史』福井憲彦訳（日本エディタースクール出版部，1990 年），p. 379.

である。

> 今や，バルタザールがわたしたちの元にいたのはわずかな期間でしかなく，そもそもわたしたちのものではなかったのだし，わたしたちは不幸にもバルタザールのうちにつかのまの喜びしか知りえなかったという事実を受け入れねばならなくなりました。神の御心を受け入れ，バルタザールを神様の元に帰らせてやらねばなりません。なぜなら今やわたしに残されているのは，苦悩と心痛と涙だけだからです。わたしはできるかぎり，このことを心から閉め出すよう学ばねばなりませんし，愛するあなた，あなたもそうしなくてはならないのです。頭から閉め出して，辛抱強くあらねばなりません。おそらく神様はふたたびお憐れみくださり，忘れさせてくださるでしょう，だってもうこんなに苦しめられたのですから。[21]（和訳筆者）

ここで，バルタザールという子供が「そもそもわたしたちのものではなかった」，神からわずかな期間つかわされた者が神のもとへ帰るのだと言われているところに注目してほしい。フロイトは，喪の過程を，失われた愛の対象からリビドーを引き上げるプロセスと定義している。[22] リビドーというのは一種のエネルギーとして想定されており，「それは愛と言う名で理解されるすべてのものに関係している」。そういうエネルギーを向けていた対象が死ぬなどして失われると，必然的にそのエネルギーを引き上げる作業が行われることになる，それが喪の過程である。ただ必然的とはいえ，殉死が規範とされる環境であれば，死んだ対象からリビドーを引き上げる作業を進めてはならず，逆に，生きている者が死へと向かうことになる。喪の作業を進める中で，自我は「いわば，失われた対象と運命を共にすることを望むかどうかの決定を迫られ」，生き延びることを選んでいるのである。ここではバルタザールが宗教的文脈のうちに置き直され，「そもそもわたしたちのものではなかった」と，神への所属を認められる。言い換えれば，バルタザールという特定の個体からのリビドーの引き上げが，すでに確実に始まっている。そして，リビドーがバルタザールを離れることに対する怖れは感じられない。もしそれを怖れていたら，「できるかぎり心から閉め出す」とか，神様が「忘れさせてくださる」とは，おそらく書けなかったはずだ。

---

[21] Steven Ozment, *Magdalena & Balthasar* (New Haven and London: Yale University Press, 1989 [1986]), p. 101.

[22] Sigmund Freud, Mourning and Melancholy, *Standard Edition Vol. 14*, trans. James Strachey (London: Hogarth Press, 1995 [1957]), p. 255.

ところが19世紀になると，ひとは死者を忘れまいとする。家族の死，特に子供の死にあたって，その特定の個体からのリビドーの引き上げをできるかぎり遅らせようとした。アリエスは，「愛する死者たちの追憶を生き生きと保ち続け」，「むしろ死と共に生きることに満足を見出すようにな」ったと指摘している。[23] 死んだ子供の姿はそのまま残そうとした。それはもはや眠る姿としての死者ではなく，目を開いた，生きているかのような絵や写真であり，墓もそれに準じるものになっていった（図14，15）。そして，思い出の長期保存を期して，ひとびとは墓参りという習慣を身につける。喪服をめぐる規則は19世紀半ばを頂点に詳細をきわめた。死者を忘れることが拒否され，死者を悼み続けることが美化され，商業化もそれを支え，喪の過程は盛大かつ複雑に拡大・延長されたのである。

一方，ブルジョア家庭のインテリアは，空虚や空白を執拗に埋めようとする方角へと向かっていた。19世紀のはじめ，新古典主義時代の室内はすっきりしていた（図7，11）。ところがビーダーマイアー後期，1840年頃から室内にモノが増えはじめる。世紀後半には家具や小物や植物などがどんどん増え，世紀末にかけて，空隙恐怖 horror vacui の様相

図14　1900年頃の死んだ子供の肖像[24]

図15　パリ，パッシーの墓地[25]

[23] フィリップ・アリエス『死と歴史』伊藤晃・成瀬駒男訳（みすず書房，1983年），p. 58；『死を前にした人間』成瀬駒男訳（みすず書房，1990年），p. 410.

[24, 25] アリエス（1990年）『図説　死の文化史』，p. 383，p. 386.

図 16　1842 年 [26]

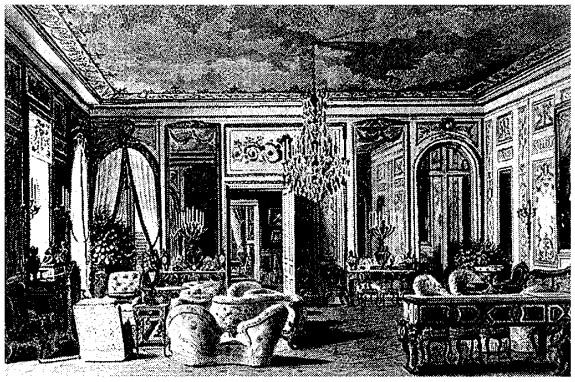

図 17　1863 年 [27]

図 18　1867 年頃 [28]

図 19　1880 年頃 [29]

図 20　1890 年[30]

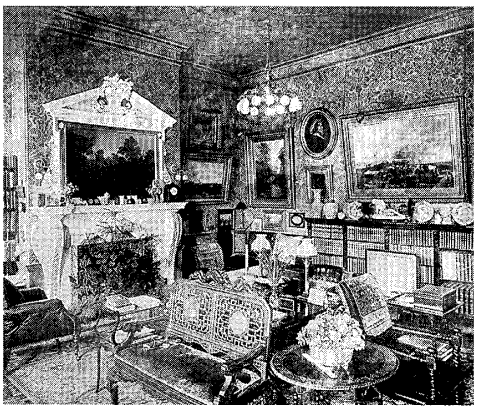

図 21　1900 年頃[31]

を呈するまでに空間は埋められていった（図 16〜21）。

ブルジョア的家族愛の成立，喪の延長・拡大，空隙恐怖という展開をあわせて見ると，19 世紀にはリビドーの及ぶ領域にかなり大きな変化が起こったのだと考えられる。300 年前なら神の元に戻っていったと見なされた死者を，19 世紀は生きているものの周囲に拡がる愛すべきものの世界のうちに留め置こうとし，その喪失を悼み続け，「むしろ死と共に生きることに満足を見出す」ようになった。さらに，100 年前ならなにもなくてかまわなかった空間を，モノで埋めずにいられなくなっていた。かつて存在した人がいなくなった後もその人をそのまま記憶に留め置こうとしただけでなく，かつては空隙でありえ

[26] Praz (1964), *op. cit.*, p. 309.
[27] *ibid.*, p. 355.
[28] *ibid.*, p. 375.
[29] *ibid.*, p. 374.
[30] Susan Lasdun, *Victorians at Home* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1981), p. 14.
[31] *ibid.*, p. 2.

たところにモノを置かずにいられなくなっていたのである。自我周辺に拡がるリビドーの及ぶべき領域は，死者も含むまでに拡大した。さらにそこにはより高い密度でリビドーを送り込むべき対象が求められるようになっていた。拡大したリビドー空間に対象がないとみなされると，その空隙は埋められねばならなかった。たとえアウェアネスが生じていない可能性があろうとも，存在すべきアウェアネスを想定し，「忘却」・「抑圧」といった言葉でアウェアネスの空隙を指し示し，「無意識」から救い出した記憶で空隙を埋めようとするフロイトの努力も，このリビドー領域をめぐる変化にともなう動きのひとつだったのであろう。

インテリアが高密度化した理由のひとつは，家具調度や部屋の単一目的化（≒細分化）である。産業革命が職住の分離をもたらすと，労働者階級との差別化を進める中産階級は，外界の汚染から「家」を切り離し，一種の「聖域」とした。さらには「家の内部にあってもまた，区分された空間が各々独自のプライバシーを持ち，それぞれが小さなプライバシーを囲い込む」構造を持たされるようになる。「どの部屋もどの家具も，それぞれが理論的にはそれにしか果たすことのできない独自の機能を持っていた。それは他のものでは決して果たすことのできない任務であり，多目的に用いる代用品で済ませるというのは，あまりリスペクタブルなことではなかったのである」（和訳筆者）。[32]　プライバシー欲求の高まりと絡みあっていたのである。

こうしてモノが増え，空間が埋めつくされていった挙句，反動として，世紀末からモダニズムがその掃除をはじめる。フロイトが夢やジョークがしばしば洒落や掛け言葉のように複数のコンテクストにまたがって意味を多重決定されることを指摘したのはその頃である。検閲の結果として完成した線的な語りとしての顕在夢は，そのような多重性の抑圧の上に成り立ったものであり，だからこそ，そこで圧し殺され（ようとす）る潜在的欲望を密かに充足することに成功しうるのだと，フロイトは高度に戦略的な抑圧の存在を暴いた。だが，それはビクトリア朝ブルジョアの家で，日々物理的なレベルで実践されていた抑圧と同じものなのではないか。シングルパーパスだからこそリスペクタブルでありえたビクトリア朝ブルジョア家庭の部屋部屋は，そこで抑圧されている多元性ゆえに，願望充足が密かに行われうる場でもあったのではないか。

フーコーは『性の歴史』の中で，ビクトリア朝的な「抑圧」を，細分化や濃密化による

[32] Judith Flanders, *Inside the Victorian Home* (London and New York: Norton, 2003), p. 31.

欲望強化の戦略だと指摘している。[33]「忘れまいとすること」は，一見「抑圧」とは反対の動きのように見えるが，欲望の細分化の前提となるリビドー領域の拡大や高密度化とともに，近代的な「家」と「家族」をめぐる戦略の一端と考えるべきなのだ。

[33] ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ　知への意思』渡辺守章訳（新潮社，1986 年）